

271  
JK

K110.1  
98  
4

重野安禪  
所啓行  
丹所啓行  
下田利徳  
三田利徳  
同輯

# 修身小學

版權免許

集英堂藏板



## 修身小學卷四



### 第一章

重野安禪 閱  
丹所啓行 同輯  
下田利徳

夫學須靜也  
才須學也非  
學無以廣不  
非靜無以成  
學

○學の靜にして勉むべく。才は學びて  
廣むべし。學にあらざれば。才を廣むる  
ことあらず。靜よちらざれば。學を成すこ  
となし。三國志

修身小學卷四 第一章

學者患心慮  
紛亂不能寧  
靜

善學者志不  
倦心不盈一  
善之不聞一  
理之不知歎  
然如飲食之  
不飽也  
鹵莽而厭煩  
者決無有成  
之理

學而不思則  
罔思而不學

則殆

讀書少則無  
由考校得義  
精

書不記熟讀  
可記義不精  
細思可精惟  
有志不立直  
是無著力處

○學者の患ハ心紛亂して寧靜なるこ  
と能わざるにあり。程子

○善く學ぶ者は志倦まじ心盈たじ。一  
善未だ聞かず。一理未だ知らざれば。飲  
食の飽かざるが如し。慎思錄

○粗漏にして煩勞を厭ふものハ決  
て事を成就せじ。呂氏童蒙訓

○學ぶとも思慮せざれば事理に罔く。

思慮するのみみて學むざるとまハ亦  
事を爲まじに殆し。論語

○書を讀むこと少なきをバ彼此を考  
へ合せて義理の精微を會得するに由  
あり。張子

○書は熟讀せれば記臆まべし。義ハ細  
思まれば精詳あるべし。たゞ志立たざ  
れば力のつけどころなし。朱子

獨學而無友  
則固陋而寡  
聞

天下之可悅  
莫若朋友講  
習

善人同處則  
日聞嘉訓惡

人從遊則日  
生邪心

爲學正如桴  
上水船一篙  
不可放緩

聖人不貴尺  
璧而貴尺寸  
之陰

大禹聖人乃  
惜寸陰至於  
衆人當惜分  
陰

○獨學にして朋友  
なまよとまよ。聞見せ  
むくして。固陋よま  
る。禮記

○世間よ悦ぶべき  
は。朋友の講習なり。  
程子

○善人と同く處る



明本講義圖

ときハ。日々よ嘉訓を聞き。惡人と伴ひ  
遊ぶときは。日々に邪心を生む。爰延

○學問ハ。流きよ湖ぼる舟を漕くが如  
し。一棹も油斷むべからぬ。畜徳録

○聖人は。一尺の美玉を貴むずして。尺  
寸の光陰を貴ぶ。淮南子

○夏の禹王は。聖人なまよども。尚寸陰を  
惜めり。衆人よ至りては。分陰を惜むべ

勿謂今日不學而有來日。勿謂今年不學而有來年。

學者之講學。勤業皆以時日力。故志士惜日短。

不使他事勝好學之心。則

陶侃

○今日學をばざして。明日ありと謂ふこと勿れ。今年學をばざして。來年ありと謂ふこと勿れ。朱子

○學を講ぶ業を勤るは。皆時日の力による。故に志あるものハ。日の短きを惜む。慎思錄

○他事をして。學を好むの心に勝しめ

有進

人之學不進。只是不勇。

學者用心不分。必有進益。

學者立志須教勇猛。自當有進。志不足。以有爲此學者之大病。

されば。學問自然よ長進す。薛瑄

○學の進まざるハ。勇み勵まざるよよれり。程子

○學者心を用ふる。多端あらざれば。上達疑ひあし。朱子

○學者志を立ること。勇猛ならしむべし。志立たせしめて。事を爲せしよ足らざるを。學者の大病なり。朱子

志不立天下無可成之事

○志立ざれば天下何事も成らば王陽明

○志を立ることの。大にして高くまべ

し。小にして卑くければ。小成は安んじて

成就しがたし。大和俗訓

○人は必古聖賢を師として。其教を尊

び。其書を読み。學問して。人の道を知ら

ざるべからば。五常訓

○人の不學よして。道を知らざるは。農

人の田つらるる事を知らざるが如し。同上

### 第二章

○身の父母の遺體なり。父母の遺體を

奉行せらるるは。敬み重んぜざるべけんや。

禮記

○孝子の心は敬慎あるは。手に寶玉を

執るが如く。盈てる器を捧ぐるが如し。

同上

孝子如執玉如奉盈

身也者父母之遺體也。行父母之遺體。敢不敬乎。

苟倫理一失  
雖具人之形  
其實於禽獸  
何異哉

孝為百行之  
首猶須學以  
修飾之況餘  
事乎

愛親者不敢  
惡於人敬親  
者不敢慢於  
人

事父母能竭  
其力事君能  
致其身

人之不可忘  
孝也孝者何  
常以父母心  
為心而已矣  
父母憂而憂  
焉父母喜而  
喜焉

親或有疾必  
親侍之或痛

○若し人たるの道を失へむ人の形を  
具ふといへども禽獸と何を異あらん  
や。丘濬

○孝ハ百行の首めあり。猶學で以てこ  
れを修むべし。況て其餘の事をや。顏氏家訓

○親を愛するものハ他人は接りても  
惡むこと多く親を敬するものハ他人  
に接りても慢ることなく。孝經

○父母に事へては其力を竭して惜ま  
ず。君も事へてハ其身を致して顧みむ。  
論語

○人たるもの孝を忘るべからず。孝ハ  
他にあらば常に父母の心を以て己が  
心となすのみ。父母憂ふを己も憂  
へ。父母喜べば己れも喜ぶ。畜徳録

○親若し疾あれバ必親ら其側は侍り

或痒必搔抑之

孩提之童無不知愛其親及其長也無不知敬其兄也

弟幼無知小過勿責或有急難彼此援釋

て看護し。若し痛痒あれば必こまを抑へ搔くべし。童子習

○幼稚の童も其親を愛することを知らざるはあく。其成長するに至りては其兄を敬ふことを知らざるはなり。孟子

○弟はいとけなくして知恵なく。是こゝの過ありとも責ることなかれ。兄弟の間若し事急にして難儀あらば互に

助け救ふべし。童子習

○兄は弟あつとて。似せて愛を薄くせむべからば弟は兄あつとて。似せて不敬なむべからず。初學訓

○朋友の間恭敬を主として。交るものは日よ親み深くして。益を得ること最も速なり。程子

○善を勧めて爲さしむるは朋友の道

善朋友之道也

於朋友主其敬者日相親與得效最速



與善人居如  
入芝蘭之室  
久而自芳也  
與惡人居如  
入鮑魚之肆  
久而自臭也

晏平仲善與  
久交久而敬  
之

損友敬而遠  
益友宜相親

沉交之道與  
其所長而避  
其所短則歡  
心得矣

年長以倍則  
父事之十年  
以長則兄事  
之五年以長  
則肩隨之

なり。孟子

○善人と居るときは、香草の室よ入るが如く。久きを經て自ら芳し。惡人と居るときは、鮑魚の市に入るが如く。久きを經て自ら臭し。家語

○昔齊の晏平仲善く人と交をり。交ること久しくありて之を敬し怠らず。論語

○損友の敬してこそを遠ざけ。益友の宜しく相親むべし。方孝孺

○沉く交るの道。其よきところを取りて。其あしきところを棄れ。相歡ぶの心を失ふべし。韓琦

○年齢我より長むる。一倍よハ父と一  
事へ。十年程も長ずるハ兄と一  
事へ。五年程も長むるハ路を行くよも少

徐行後長者  
謂之弟疾行  
先長者謂之  
不弟

く退くべし。禮記

○徐かよ歩みて。長者に後るしを弟といひ。疾く歩みて。長者に先つものを不弟といふ。孟子

### 第三章

○禮儀は容貌を正

禮儀之始在於正容體齊



顔色順辭令

禮不妄説人  
不辭費

禮不踰節不  
侵侮不好狎

くく。顔色を齊へ。言辭を順よせしより始まる。禮記

○禮は妄りに人を悦ぶしめず。多く辭を費さば。同上

○禮は程合を過ごさば。侵し侮らば。ちかづき狎れぬ。同上

○禮の中を得るを貴ぶ。中とい過不及ふきをいふ。五常訓

禮本在于敬

接人以愛敬  
為道愛是不  
惡人仁之發  
也敬是不慢  
久禮之實也

君子義以為  
廣禮以行之

人身所為雖  
多端要之不  
過言行二者  
而已故修身

○禮の本ハ人を敬ふにあり。朱子

○人に接するよハ愛敬を以て道となす。

愛ハ人を惡まじ。是れ仁の發なり。敬ハ

人を慢らじ。是れ禮の實あり。初學知要

○君子ハ義を以て本となす。禮を以て

これを行ふ。論語

○人の爲む所多端なきとも。其要ハ言

行の二つあり。故に身を修るにハ言を

須於言行上  
誠之敬之

言不務多必  
審其所謂行  
不務多必審  
其所由

克念而後言  
克念而後行  
言行常當在  
于克念之後

誠にー行を敬むべし。初學知要

○言ハ多きを務むして。必其趣意をた

かよし。行ハ多きを務むして必其縁

由をたかよむべし。荀子

○克く念ふて後ハ言ひ。克く念ふて後

に行ひ。言行ハ常に思念の後ハあるべ

。慎思録

○信ハ心に誠あるあり。心ハ誠あれば

信者接人以實之謂是接久之本人若無信便言行皆虛妄

無多言多言多敗無多事多事多患

躬自厚而薄責於人則遠

言行の上にあらず。五常訓

○信は人子接るに實を以てするなり。

こそ人子接るの本なり。人も信多く

んば。言行皆偽りとある。初學知要

○多言多事ることなかれ。言多ければ敗

れ多し。多事あることなうも。事多けれ

ば患多し。顏氏家訓

○身を責るに厚くして。人を責るに薄

怨

責善之道要使誠有餘而言不足則於人有益而在我者無自辱矣

終身爲善一言則敗之可不慎乎

滿招損謙受益

謙不止於接又平日守

けれ。怨を受ることなり。論語

○善を責むるの道。誠餘りありて言足

らざるは。人に於て益あり。我より有りて

は辱あり。程子

○終身善をありても。一言にしてこれ

を敗ることあり。慎まざるべけんや。家語

○自滿の損を招き。謙遜の益を受く。書經

○謙を人に接るに。とどまらば。又平日

身之要也

天道虧盈而益謙

人有善不可自矜自矜則善日削

身を守るの要法なり。初學知要

○天道いみづるを虧いてへりぶたる益也。易經

○謙なるものは己よ知るを以て知らずとあへ己よ能くまを以て能くせむとなは。大和俗訓

○人善行あるも自ら矜るべからば自ら矜むば善行日よ減少す。朱元璋

身爲不善而求爲人所容者不肖之人可耻之甚也

君子之處事也其神靜氣定故從容不迫不動聲色

○身不善をなして人に容れらるることを求むるは愚人にして耻づべきの甚しきふり。慎思錄

○善をさぐることはやましく善を行ひて其名聞を求めざることはかたし是れ眞の善あり。大和俗訓

○君子の事を處するや心を静め氣を定め從容として迫らむ顔色音聲を變

修身小要 卷之四 十一

而處置得精  
謀

天與水運行  
訟君子以作  
事謀始

慎其初惟其  
終以不困不  
惟厥終終以  
困窮  
建其本而萬  
物理失之毫

釐差以千里

千丈之堤以  
蟻蟻之穴而  
潰

凡事豫則立  
不豫則廢言  
前定則不跲  
事前定則不  
困

ぜむ。故より其處置精く詳かきことを得  
るなり。慎思録

### 第四章

○君子の事を作まは。必之を始に謀る。  
易經

○其初を慎み。その終を思へば。困まじ。  
その終を思まざれば。終に困窮す。書經

○其本を建れば。萬事おさまる。毫釐の

間違も千里のたがひとなる。易經

○千丈の堤も。蟻の穴より潰え崩るこ  
とあり。韓非子

○凡そ事豫めまれば成り。豫めせざま  
ば廢る。言前よ定まれば。躓くことま  
く。

事前よ定まれば。困むことま  
く。中庸

○善く人の言を用ひ。人の諫めを聞く  
ものハ。過寡く行正くして善ま譽あり。

大和俗訓

○後悔のあやまりより起る。怒と欲とをこらゆれば。過少く悔少くして。後の禍あり。同上

○悔ることありて。其過を補んことを思へば悔なり。薛瑄

○事を行ふごとに。過をからん事を思ふべし。過あれば。必後悔あり。大和俗訓

有悔思有以補其過則無悔矣

衆人往々不喜聞其過而拒諫文過自是自用則小之至不知之甚也

中人之情也。有餘則後不足。則儉無禁。則溢無度。則逸從欲。則敗

○衆人の往々其過を聞くことを喜びぬ。諫をふせむ。過をかざる。これ不知の至りなり。慎思録

○禍の利を貪るより起る。利をむさぼむ。却て財を失なひ。禍來る。家道訓

○常人の情。餘あまひ侈り。足らざれば。儉を禁令なけむ。溢縱し。法度をければ。放逸す。其欲を恣よむれば。事を敗る。

君子寡欲則不役於物可以直道而行

人欲無窮財產有限以有

家語

○君子欲寡。故に物は使役せられずして道直くして行ふ。司馬光

○儉約にして財を費さざるは尤良法なり。家道訓

○費へをはぶき奢りをおさえて家財の分限は應じて用ふべし。同上

○人欲は窮りなく財産は限りあり限

限財産而徇無窮人欲為不節之以制度則必傷財

瓦石可用何必金玉麤器可用何必精好

勤業者不急情以失時儉用者不奢侈以傷財

りあるの財産を以て限りなきの人欲は徇ふもこれ節し止めざれば必財を敗る。初學知要

○瓦石の卑しきも實用を爲す何ぞ金玉の美を用ひん。麤惡の器も實用を爲す何ぞ精巧の物を選択むん。畜徳録

○業を勤むるものを怠りて時を失ふことなく用を儉むるものハ奢りて財



人有積財而不能散者君子謂之愚知散之而不費諸道者爲愚一也

儉之中禮人皆悅服儉之不中禮人皆鄙之

積善之家必有余慶積不善之家必有余殃

善惡必有禍福之應天道好遷其理甚昭明可信

を傷ふことなり。慎思録

○財を積み畜へて

散せざる者の愚人

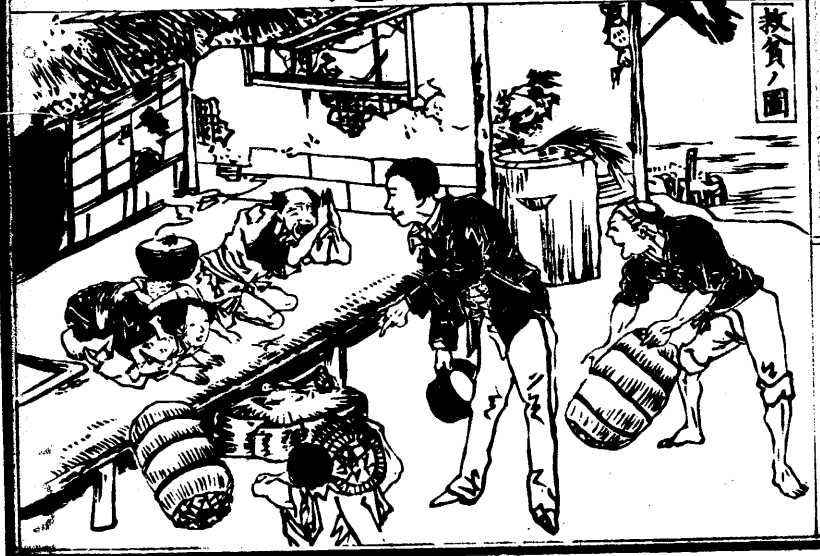
なり。散じて其道に

適せざる者も亦愚

人なり。劉基

○儉約して禮法よ

適へば人皆悦び從



救貧ノ圖

ふ。儉約して禮法に適はざれば人皆鄙み輕んむ。方孝孺

○善を積むの家よ。必餘れる慶ひあり。不善を積むの家よ。必餘れる災ひあり。易經

○善と惡よ。必禍福の應あり。天道は還すことを好む。其理甚明なり。信むべし。畏るべし。慎思録

孝弟の徳

K110,1

修身小學卷四終

明治十七年七月廿六日出版  
同 年九月四日出版  
同 日出版

定價金七錢

編輯人

東京府士族

丹所啓行

東京府士族

下啓助

東京府士族

三田利徳

東京府士族

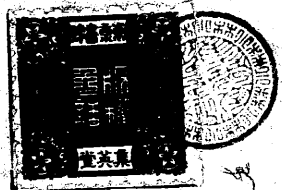
小林八郎

日本橋區本町一丁目六十二番地

出版人

發行者

野洲市大工町  
集英堂支店



同 同

# 修身小學

重野安輝  
丹野安輝  
下野安輝  
三田利徳

同輯 閱

卷五

K1101  
98  
5